

チャイルド・ケアリング・デザイン

子どもたちのまち育て参加 —まち育て活動及び絵地図コンテストを通して—

村田義郎（株式会社エム環境デザインシステム 代表取締役）

近年、全国各地で住民によるまち育てのN P O法人が設立され、住民が主体となって、地域コミュニティが抱える高齢者支援、子育て支援、商店街の活性化、地域整備など様々な問題の解決に取り組んでいます。このような「まち育て活動」に、子どもたちが参加する機会が増えています。

私が企画し、運営した住民参加による「まち育て活動」の事例をもとに、子どもたちの参加が活動に及ぼした影響、また、子どもたちにとっての参加の意味や意義を考えてみたいと思います。

まちの整備計画の事例から

最初の事例は、Y市で小学生から80才の高齢者までが参加して、道や水辺空間の整備計画を創った時のことです。

この計画づくりは、1班7～9人（9つの班に分かれ、うち6つの班に3、4人の子どもがそれぞれ入っています）のグループ作業で進めていきました。まず、計画地周辺を歩き、その場所の問題点や「たから：環境資源」を探し、現場を知ることから始めました。次に、「こんな道、水辺になったらいいな」とみんなで夢を語り、その夢を計画案としてかたち（模型）にしました。そして、参加者全員で各班の計画案を評価し、それを統合しながら最終の計画案をまとめていきました。



■写真1-1：活動の様子

た。約1年にわたる活動でしたので、節目には花見やソーメン流しといった楽しみを盛り込みながら活動を続けました。（写真参照）

運営にあたっては、楽しく、誰でもが自由に発言できるような場づくりを心がけました。最初、子どもたちは遠慮がちでしたが、次第に自由に発言するようになりました。また、子どもたちは、具体的なそこで遊び、使い方をイメージし、他の参加者と話し合いながらそれを形にしていきました。

写真2は子どもたちが主体となって創った案で、参加者の評価が高く、これを基本に各案を統合し、最終案ができました。子どもたちの居場所だけでなく、お母さんたちが井戸端会議ができる場所、お父さんたちが水辺を眺めながらビールが飲める場所、高齢者がゆったりと過ごせる場所など、それぞれの居場所が創られています。子どもたちの参加した案は、いずれも楽しさにあふれ、創造的で柔らかな環境の案となっています。

子どもたちの参加は、他の参加者や活動に次のような影響を及ぼしました。

まず、大人も子どもの目線でまちを見直すようになりました。観念的でなく、身体体験的に（その場所に身を置き、具体的な使い方をイメージして）計画を考えるようになりました。その結果、計画の質が変容したのではないかと思います。大人と子どもが相互に活



■写真1-2：活動の様子

性化され、みんなが心を開き、自由闊達な対話が生まれ、創発の場となり、創造的思考に火がつき、人と人との関係、人と環境との関係が変容しました。

また、子どもたちは、まち育て活動への参加のプロセスのなかで次のようなことに気づき、学びました。

①地域の大人と交流し、自分の考えを他者へ伝え、逆に他者の意見を聞くといった他者とのコミュニケーションの方法を学びました。

②自分たちのまちの暮らし、コミュニティや環境、文化を知りました。

③子どもは、身近な環境を体で感じ、まわりの人や環境と対話しながら、自分の居場所を創造していきました。

④地域コミュニティのなかでの自分に気づきました。

⑤他者との対話や共働作業を通して、ワークショップの意味、また、住民参加のまち育て活動の社会的な意味や意義に気づきました。

まち育てのワークショップに参加した子どもたちの次のようなコメントにこのことが現れています。

「初めて参加したとき、ワークショップは何のためにやるのか、どんな意味があるのか分かりませんでした。だけど、話し合ったりしているうちに、自分たちの町は、市民の人や私たちが考えて意見を出し合ったりして、自分たちで変えていくことが大切だと思いました」

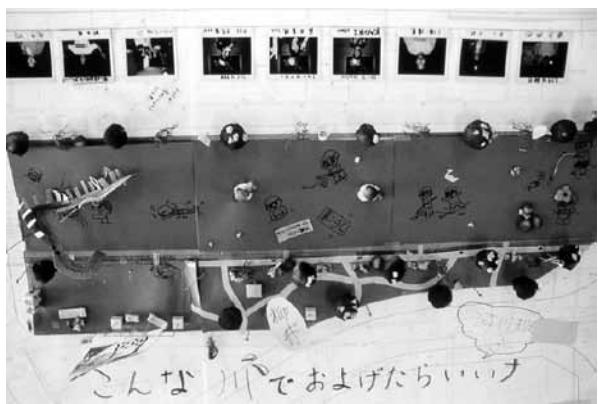
「私がワークショップで学んだことは二つありました。一つは、私が町をつくることは無理だと思っていたのに、使う人が考えると、すっごく深いものができるとわかったことです。もう一つは、自分の考えを伝えることはとても大切だということでした。その考えが、みんなで考えることによって素敵なものになるこ

とがよくわかりました」

「ワークショップでいっぱい友だちができました。子どもだけでなく、大人の友だちもできました。僕たちの考えた町が未来にできるのが楽しみです」（小田小5年生）



■写真1-4：活動の様子



■写真2：計画案



■写真1-3：活動の様子

絵地図コンテストの事例から

もうひとつの事例として、子どもたちに身近な町や環境をテーマに創ってもらった絵地図コンテストについてお話しします。このコンテストは公開審査で、審査の場に子どもたちも参加し、自分の作品について審査員に話をします。単に作品の善し悪しだけでなく、その作品に込められた作者の思いを評価しようというものです。

作品の一つを見てみると、子どもたちの遊び環境を奪っている現状がみられます。道は車に占拠され、子どもの遊び場だった車の入らない路地は消え、道路が拡幅整備され、ところどころに児童公園がつくられています。古い家は壊され、駐車場やビルになっています。この絵地図でグレーに塗られているところは駐車場です。でも子どもたちの遊び場は行政から与えられた児童公園とか広場ではなく、駐車場や小さな空き地であったり、コンビニであったりしています。

しかし、そんな環境のなかで、身近な小さな自然を自分の目線で捉えている子どももいます。自分の部屋の窓から見える1本の樹につくられた小鳥の巣、その巣づくりから雛が巣立つまでを観察し、巣の材料が何か、それを小鳥がどこから運んでいるのかを追跡した絵地図もあります。地域の環境やまちの現状を見事に表現しています。また、子どもの眼の高さに自然があることの大切さを語っています。

子どもたちは絵地図づくりという創造的な活動を通して、身近な環境や地域のことを知り、家族や地域の人とのコミュニケーションにより、自分の居場所に気づきます。子どもたちが地域の環境に関わるということで、間接的ではありますが、まち育て活動に参画することになります。

まち育て活動での地域整備の計画案や環境絵地図といった創造的な作品をつくるなかで、自分たちを取り巻く環境が意志化され、フレーベルのいう「子どもは外なる環境からの刺激によって初めて反応するといっ

た受動的な存在ではなく、自ら動き世界の意味を積極的に求め、その意味を読みとる存在」、「子どもは予感の持ち主」となっていくのではないかでしょうか。※2

《注》

*ひらがな表記の「まちづくり」は、住民が主体となって、まちの望ましい将来像を考え、「自分たちのまちは自分たちでつくる」という活動のプロセスを意味しています。しかし、最近では、行政が住民参加とは無縁のものまで「まちづくり」という言葉を使うようになり、本来の意味が失われるようになりました。また、「づくり」という言葉の中に何かを壊して新たにつくるというイメージがあることから、子育てと同じように、住民が自らのまちを育てていくプロセスを表現するものとして、「まちづくり」に変わって「まち育て」という言葉が使われるようになってきました。このような背景から、ここでは「まち育て」という表現をしています。

《引用文献》

- (1) 延藤安弘『まち育て』を育む』東京大学出版会、2001年、10頁～15頁
- (2) 矢野智司『子どもという思想』玉川大学出版部、1995年、109頁



■写真3：絵地図コンテストでの発表風景



■写真4・5
子どもたちがつくった絵地図作品

